

電力土木の歴史－第2編 電力土木人物史（その6）

正会員 稲松技術士センター 稲松敏夫（技術士）

History of Electric Civil Engineering
-Part II History of electric civil Engineer.

by Toshio Inamatsu.

概 要

筆者は先に第1回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に、各河川の水力開発について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。さらに6年前からその中30名の人々の業績を詳述し、第2編電力土木人物史として21名（知久清之助、伊藤令二、北松友義、目黒雄平、高桑鋼一郎、久保田豊、内海清温、熊川信之、岩本常次、吉田 登、水越達雄、市浦 繁、鶴飼孝造、和澤清吉、大林士一、金岩 明、大橋康次、山本三男、味埜 稔、中村光四郎、浅尾 格）について発表し、今回はその6として数名を発表する。（明治～昭和期、土木、開発した人）

（I.分類 人物史、II.分類 河川、エネルギー）

(1) 永田 ^{すすむ}年



昭和47年

(イ) はじめに

筆者が昭和22年10月勤めていた日本発送電北陸支店に永田年が支店長として赴任され、約2年間お仕えした時の印象と、北海道電力副社長として北海道の電力開発の第1線で活躍された氏に直接指導を受けられた大橋康次氏（もと北海道電力副社長）から送っていただいた、年譜業績、写真並びに御令息永田龍夫氏から送っていただいた家族写真、及び“あばれ天竜を治めた男”（田村喜子著）で本稿を取りまとめた。各氏に感謝致します。

(ロ) 永田 年の年譜

明治30年4月 福岡県筑後市に出生

大正11年3月 東京帝国大学工学部

土木工学科卒業

大正11年4月 台湾総督府入省技手

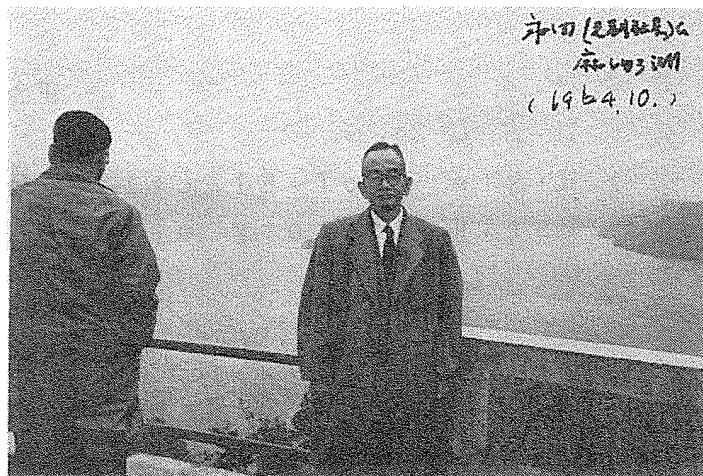
大正15年8月 台湾総督府技師

昭和2年3月 内務省土木局入省技師

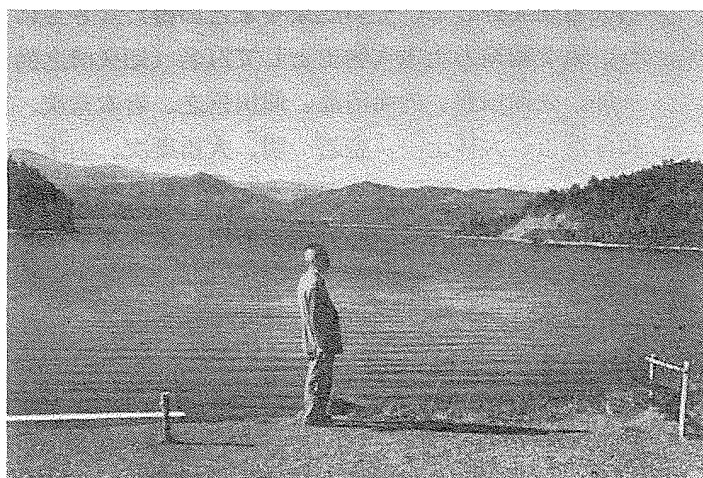
昭和11年 6月 京都府鴨川改修事務所長
 昭和14年 6月 満州国交通部技正
 兼遼河治水調査所長
 昭和15年 4月 東北振興電力(株)土木部計画課長
 昭和16年12月 日本発送電(株)入社
 昭和20年 4月 " 四国支店土木部長
 昭和21年 5月 " 東海支店土木部長
 昭和22年10月 " 北陸支店長
 昭和24年 9月 " 北海道支店長
 昭和26年 5月 北海道電力(株)取締役副社長
 昭和27年10月 電源開発(株)理事
 昭和28年 9月 " 佐久間建設所長
 昭和32年 1月 電源開発(株)秋葉建設所長
 兼佐久間建設所長
 昭和32年 3月 " 理事
 土木部長事務取扱
 昭和35年 1月 " 顧問
 昭和35年 3月 東京電力(株)技術最高顧問
 昭和46年 6月 " 顧問
 昭和46年 7月 日本原子力発電(株)顧問
 昭和56年12月 死去、享年84才

(主な職歴)

昭和32年 9月～昭和38年 9月
 河川審議会委員
 昭和35年 2月～昭和41年10月
 技術士審議会委員
 昭和31年11月～昭和36年 6月
 国際大ダム会議
 日本国内委員会副会長
 昭和32年 9月～昭和35年 9月
 国際大ダム会議副総裁
 昭和36年 6月～昭和50年 5月
 国際大ダム会議
 日本国内委員会会長
 昭和36年 5月～昭和37年 5月
 土木学会会長
 昭和37年 9月～昭和50年 6月
 日本大ダム会議会長



摩周湖にて (1964年10月)



糠平貯水池にて (1964年10月)



大ダム会議 (モスクワ) へ1962年 6月

山小大永国山大
 崎 沢 石 田 分 本 橋

昭和40年2月～昭和41年11月

貯水池の安全に関する国際勧告書
起章委員（ユネスコ本部）

昭和42年5月～昭和44年5月

社団法人 日本コンクリート
会議議長

(賞 罰)

昭和31年12月 藍綬褒章（佐久間ダムを高度の機
械化工法により完成し電源開発に
貢献した功績）

昭和32年5月 電気学会電力賞（佐久間ダムなら
びに発電所建設の功績）

昭和37年2月 工学博士

昭和38年5月 土木学会土木賞（ダム、コンクリートの品質
管理に関する研究の功績）

昭和42年4月 勲二等瑞褒章

昭和53年4月 電気関係功労者



O. C. I 北海道視察（1950年11月）

岩本常次
（支店土木部長）

大橋康次
（支店工事部長）

ボコン氏
O. C. I
（海外技術調査団）

平井弥之助
（本店建設局次長）

永田支店長

矢崎道美
（本店計画課長）

(ハ) 東北振興電力(株)時代

(昭和15年4月～昭和16年12月)

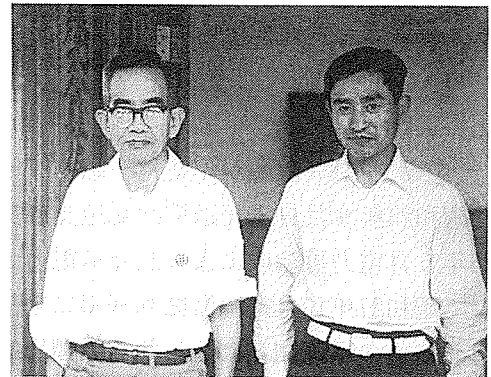
昭和11年10月会社設立、全国の官、電力、民間から水力技術者を集めた。

内務省から河川担当技師として通信省水力課長とともに水力行政に大きな影響力をもち、戦前水力計画設計のバイブルと称された「発電水力」を著した荻原俊一及び鉄筋コンクリートの権威永田年が派遣された。

荻原俊一は理事土木部長、永田年は計画課長その下に調査係長は後藤壮介、計画係長は川島隆四郎を配属した。

持寄った経験を活かして荻原-永田ラインで纏め上げた「東北振興型」の開発方式を樹立した。

昭和16年12月国家総動員会により日本発送電に合併された。



昭和30年7月佐久間建設所にて
(永田年、大橋康次)



アトキンソン社技師と打合せする
(中央) 永田佐久間建設所長

(二) 日本発送電時代

(昭和16年12月～昭和26年4月)

21年5月東海支店土木部長時代天竜川流域を調査し、佐久間ダムの高さ140m、出力42万kWの計画をまとめていた。

しかし、終戦後の混乱期でもあり、資材や人手不足さらには、立地条件に伴う技術的困難もあって、実施には到らなかった。

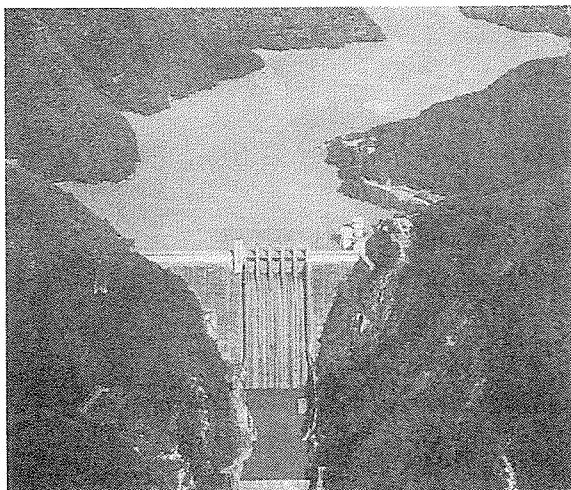
22年10月北陸支店長として富山に赴任して以来24年9月北海道支店長として着任されるまで2年間筆者は土木部水路課に勤務しており、直接、間接に公私共大変お世話になった。

当時、土木部長足立正俊、土木部次長兼水路課長大林士一、水路係長吉田登、工事課長徳野武、調査係長和澤清吉、工事係長和田芳平で、黒四ダムの調査、設計並びに終戦後の電力大改修計画等に支店長のきびしい指示指導を受けて、奮闘し、若い土木技術者として大いに張切って立ち向った事が、その後の私の人生に大きなプラスになったと痛感する。

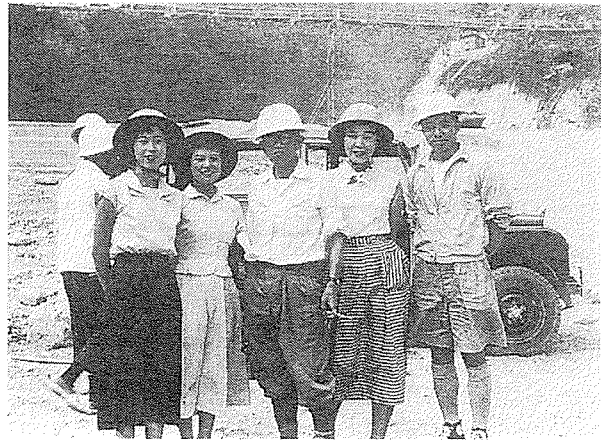
(ホ) 北海道時代

(昭和24年9月～昭和27年10月)

昭和24年9月日本発送電北海道支店長、昭和26年5月電力再編成により北海道電力副社長として昭和27年10月電源開発(株)理事に赴任される迄北海道の電源開発に3年間その間岩本常次土木部長(後に社長、会長)大橋康次工事課長(後に副社長)等とともに北海道の電力開発に挺身された。



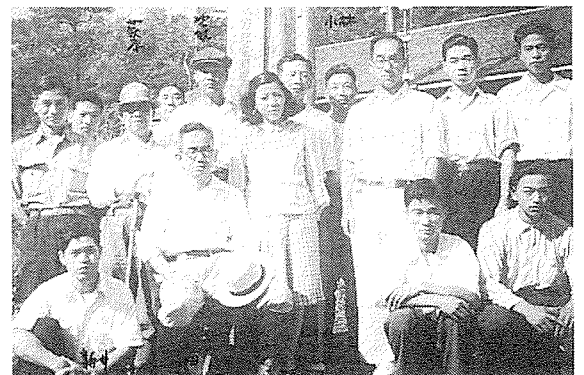
佐久間ダム



本店秘書課の女性達に
囲まれて記念撮影



永田所長を囲んで
(左端が大平裕雄 —— 流静クラブにて)



北海道然別川水力建設所(1951年8月)
永田支店長

(ハ) 電源開発(株) (昭和27年10月～昭和46年7月)

昭和27年10月電源開発理事となり翌28年9月佐久間建設所長として現地に昭和31年4月23日佐久間ダム完成。

佐久間発電所運転開始までの永田年の奮闘ぶりは「永田年あばれ天竜を治めた男」(田村喜子著)にくわしくでていて大変参考になった。「佐久間ダムは高さ156m、長さ294m、堤体積112万 m^3 それまでの日本には前例のない大きいものだ。それまでの我が国最高は、木曾川の丸山ダムの88mだから、一気に2倍近いものをつくるわけである。しかもダムサイドは天竜川の急峻な山の中、水が山を割ったように、川幅が極端に広まったところにある。ダムと同時に発電所の建設工事がある。そこへ水を送り込む直径7mの圧力トンネルの長さは1,180m、サージタンク用竖坑もある。難関はもうひとつある。

ダム建設にともなって、国鉄飯田線の付け替えも同時にやらねばならない。この鉄道は、18キロ中11km(12カ所)がトンネル通過でなかには4km、5kmの長いトンネルがある。それに橋梁、これだけでも大工事である。この両方の工事をわづか三年間で同時に完成させねばならない。

そこで永田所長は高崎達之助総裁に大型重機の使用を提案し、河床20mの掘削を3ヶ月で完了した。

土木課長高橋光雄、工区長新井儀輔をはじめ、東京電力や中部電力から電発に出向していた多くの技術者は、永田年の技術力だけでなく、その人間性を慕っているものが多かった。」

筆者も工事中2回、ダム現場を見せていただき永田所長、高橋課長に大変お世話になった。

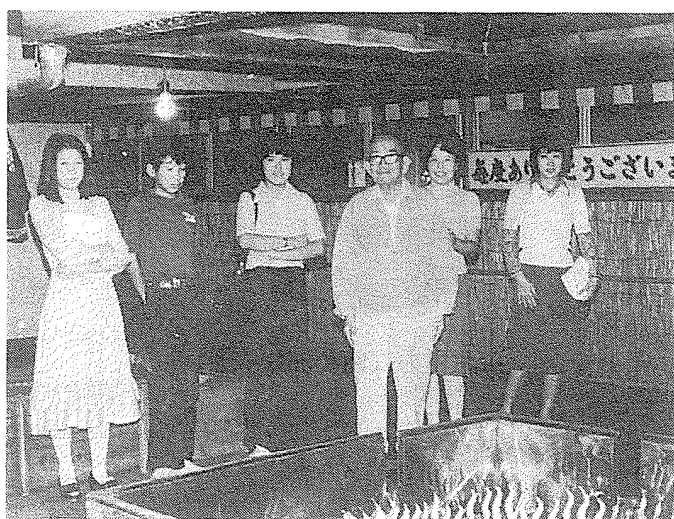
その後、国際大ダム会議副総裁、日本大ダム会議会長、土木学会会長等歴任、日本の土木界の第一人者として活躍した。



昭和46年元旦 自宅にて



昭和45年1月 家族と



昭和53年9月 孫と嫁達と

(ト) 私の永田年観

日本発送電北陸支店長としての2年間にわたる筆者が直接、間接に指示、指導を受けた印象と、佐久間建設所長時代、2回筆者が現場を案内していただいた印象と「永田年あばれ天竜を治めた男」〔田村喜子著〕を読んで筆者が感銘を受けた永田年観は、単刀直入、直載的指示、指導と、叱責したあと、ケロリとしている人間味と慈愛に満ちた人間性を感じて筆者も、先輩諸兄も畏敬に心暖まるといった点は特異な感性の持主であり、偉大な先輩だと感ずる。

特に佐久間ダムの難工事を大型重機の日本初めての積極的導入によって3年間の超短期間に完成させた洞察力と積極性については恐威の念すら感ずる。

(2) 平井弥之助



東北電力（昭和35年5月）

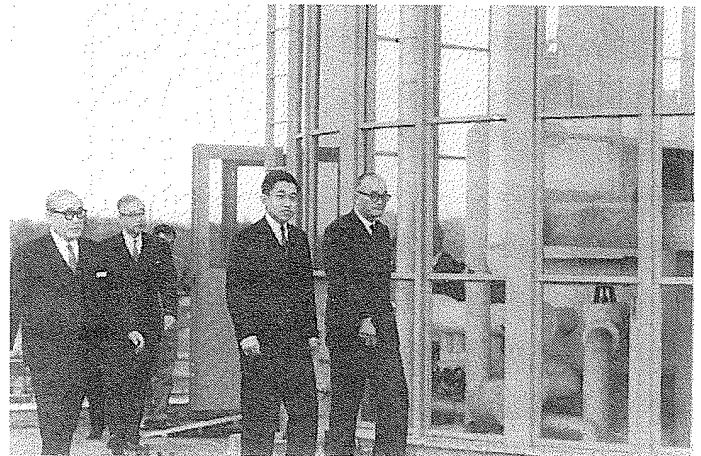
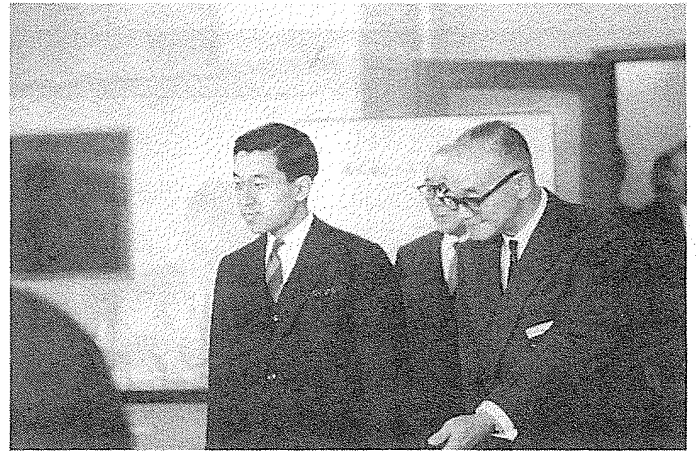
(イ) はじめに

東北電力(株)土木建築部長多田省一郎氏と電力中央研究所所長江刺靖行氏と、奥様平井英子様御好意により、資料、写真等を提供していただいて本稿をまとめた。筆者も、日本発送電(株)、北陸電力(株)を通じてお世話になり、特に昭和36年筆者が技術士試験に合格した際、平井弥之助氏（当時東北電力副社長）が面接試験の試験官で大変お世話になったことが頭に今でも残っていて懐かしい。

(ロ) 平井弥之助の年譜

- 明治35年 5月 宮城県柴田町に出生
- 大正15年 3月 東京帝国大学工学部
土木工学科卒業
- 大正15年 4月 東邦電力(株)入社
- 昭和13年 2月 同社工務部中京土木部
洞戸水力臨時建設所長
- 昭和15年 3月 揖斐川電気工業(株)出向
臨時建設部長
- 昭和15年10月 東邦電力(株)復帰
東邦電力(株)関西技術部土木課勤務
- 昭和16年 5月 東邦電力(株)退職
日本発送電(株)引継入社
黒部工事事務所長
- 昭和16年 5月 日本発送電(株)
黒部水力建設所長
- 昭和16年 6月 同社川俣水力建設
所長兼務
- 昭和16年10月 日本発送電(株)栗山水力
工事事務所長
- 昭和17年 7月 同社土木局調査部
西部調査課長
- 昭和18年12月 同社建設局大阪出張所
土木部長兼建築課長
- 昭和19年 1月 同社建設局土木部
第二課長
- 昭和20年 4月 同社本店土木部土木課長
- 昭和22年 7月 同社本店土木部長
- 昭和23年 7月 同社理事
- 昭和25年10月 同社建設局次長

昭和26年 5月 東北電力(株)
 常務取締役建設局長兼土木部長
 昭和27年 6月 同社建設局長兼技術局土木部長
 昭和28年 9月 電源開発(株)より
 田子倉建設所長を委嘱さる
 昭和29年 5月 東北電力(株)常務取締役建設局長
 昭和30年 7月 電源開発(株)田子倉建設所長の委嘱
 を解かる
 昭和35年 5月 東北電力(株)取締役副社長
 昭和37年11月 東北電力(株)副社長辞任
 昭和37年12月 東北電力(株)顧問
 昭和38年 5月 東北電気工事(株)取締役会長
 昭和42年 同社取締役相談役
 昭和46年11月 東北電気工事(株)顧問
 昭和38年 7月 財団法人電力中央研究所理事
 昭和39年12月 電力中央研究所理事
 技術研究所長
 昭和45年 4月 同所理事
 技術研究担当
 昭和35年 4月 荒川水力電気(株)取締役
 昭和40年 5月 同社取締役退任
 昭和35年 5月 常盤共同火力(株)監査役
 昭和38年 5月 同社監査役退任
 昭和49年12月 電力中央研究所理事退任
 顧問就任
 昭和61年 2月 死去享年83才

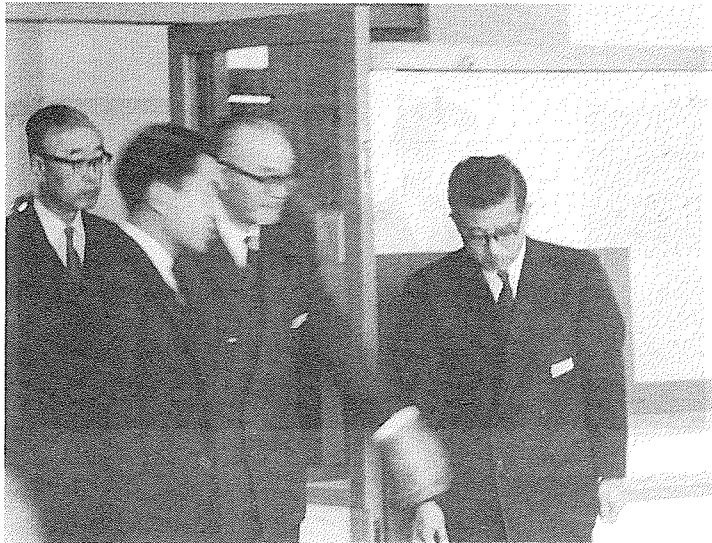


(公職歴)

昭和43年 4月 総理府電源開発調査書
 議会委員
 昭和34年 6月 土木学会 東北支部長
 昭和35年 8月 社団法人海外電力
 調査会理事
 昭和41年 5月 社団法人日本大ダム会議理事
 昭和44年 5月 財団法人超高压電力研究所理事
 昭和45年 5月 社団法人発電水力協会会長



皇太子殿下電力中央研究所視察



電力中央研究所理事
技術研究所長（昭和39年12月）

昭和51年 5月 発電水力協会会長辞任

名誉会長に就任

（賞 罰）

昭和36年11月 藍綬褒章を授與さる。

昭和47年11月 勲三等旭日中授章叙勲

(ハ) 東邦電力時代

（大正15年 4月～昭和16年 5月）

大正15年東京大学卒業後ただちに東邦電力へ入社され松永安左エ門の門下生として電力土木技術者の途をスタートされた。

飛驒川、板取川等木曾三川における電源開発に活躍の後、昭和16年日本発送電㈱に転じた。

(ニ) 日本発送電時代

（昭和16年 5月～昭和26年 5月）

鬼怒川上流、栗山、川俣等の建設所長をつとめた後、建設局土木調査課長や土木課長として戦時下のわが国水力開発を統轄した。また戦後において、同社理事に栄進、土木部長、建設局次長として敗戦直後の電力復興に総指揮をとった。

(ホ) 東北電力時代

（昭和26年 5月～昭和38年 6月）

昭和26年 5月電力再編成により、九電力会社が設立されるや、平井さんは郷里の東北電力㈱に入り、常務取締役役に就任、また更に取締役副社長をつとめたが、常に建設陣の中核となって只見川開発をはじめとする水力開発はもとより、大型火力の導入をも積極的に推進し、東北地区電源開発に挺身した。この間電源開発㈱の委嘱により国内最大水力の田子倉大プロジェクトの建設所長をつとめ、同計画の建設促進に当たった。

(ハ) 電力中央研究所時代

（昭和38年 7月～昭和49年12月）

昭和38年 7月には財団法人電力中央研究所理事に就任し、土木技術研究所長、技術研究担当等を担任し、また超高压電力研究所理事をも兼任して、49年に至る11年余の間、電力総合技術の向上発展と、研究所志気の高揚に盡力した。

(ト) 公職歴など

平井さんはこのように電気事業の経営者として幾多の功績を挙げると共に、また電源開発調整審議会委員、土木学会東北支部長、日本大ダム会議理事、東北電気工事(株)会長等多くの要職をも兼ね、貢献を積んだ。

更に電力土木技術者としても常に真摯な姿勢を貫き着実一途の研鑽の下に、只見川一貫開発をはじめとする多くの輝かしい優れた足跡を残した。

このような勲功に対し、昭和36年11月には藍綬褒章を授與され、47年11月には勲三等旭日中綬章の叙勲にあづかる等数々の荣誉に浴した。

(フ) 私の平井弥之助観

日本発送電時代、東北電力時代、電力中央研究所時代を通じて、筆者は、平井弥之助の直接間接の指導を受けた。特に昭和36年筆者が技術士に挑戦、合格した時の面接試験官が当時東北電力副社長の平井弥之助であった。

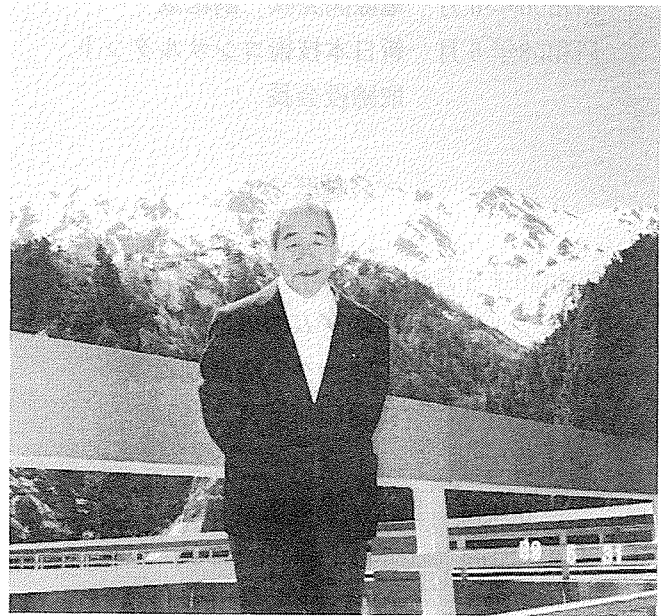
北陸の水力開発について、特に揚水発電所の北陸電力の計画と他社計画との比較や、砂礫の流下の多い取水口の2段ゲートの採用について書いた処その利害損得等30分にわたり、真剣な、しかも好意的な面接をうけた。

その時の鮮烈な印象と、平井弥之助の永年にわたる指導の結集を次の様に偉大な先輩として賞賛する。

平井弥之助は謹厳かつ誠実な人柄であり、常時電力土木技術者としての自負と後進への気配りを身に秘めていた。生涯を通じ、地に足のついた安定した信頼度の高い技術の習得発揮を希求し、常に空理空論や大言壮語を戒しめ、特に新技術や新工法の採用には慎重過ぎる程慎重な態度を崩さぬ方であった。

また経営的な意図に基く広い視野に立っての発想は終始微動もせぬ強固なものであった。省みて個性に富んだ強烈な先輩の教えとして印象深く追憶を新たにす。

(3) 野瀬正儀



黒部ダム上で（平成元年5月）

(イ) はじめに

筆者が本稿を纏めるに当り野瀬正儀氏に資料、写真等送っていただく様連絡した処、奥様より、2年前脳梗塞になり、現在静養中の由にて、奥様より資料、写真の送付をいただき、同時に野瀬正儀氏が土木学会功績賞をいただいた折、関西電力常務（現在近畿コンクリート工業(株)社長）渡部威氏との対談のテープを送っていただいたものと、さらに渡部氏から資料写真等をいただいたものを参考に本稿を纏めた。

野瀬、渡部両氏に心から感謝致します。

(ロ) 野瀬正儀の年譜

明治44年2月 神戸市に出生
昭和11年3月 東京帝国大学土木工学科卒業
昭和11年4月 富士電力(株)勤務
昭和17年4月 日本発送電(株)勤務
昭和26年5月 関西電力(株)建設部次長
昭和27年11月 電源開発(株)設計課長
昭和34年3月 同社 土木部次長
昭和34年3月 関西電力(株)黒部川第4水力発電所建設事務所長
(昭和38年11月まで)
昭和37年5月 関西電力(株) 取締役
昭和40年5月 同社 常務取締役

昭和46年 5月 関西電力(株) 専務取締役
 昭和50年 6月 電源開発(株) 副総裁
 昭和58年 6月 新日本技術コンサルタント
 取締役会長

(公職歴)

昭和40年 5月 工学博士
 (黒部ダムの現地大型岩盤試験)
 昭和41年 9月 国際ダム会議副総裁
 (昭和44年 9月まで)

昭和44年

～45年度 土木学会評議員

昭和44年度 土木学会関西支部長
 全国大会実行委員長

昭和56年 土木学会 名誉会員に推薦さる

昭和57年 土木学会会長(70代)
 会員表彰委員会委員長
 70周年記念事業委員長

(賞 罰)

昭和38年 6月 黒部川ダム竣工に際して
 銀盃一組を御下賜

昭和48年 9月 藍綬褒章受賞

昭和56年11月 勲二等端宝章

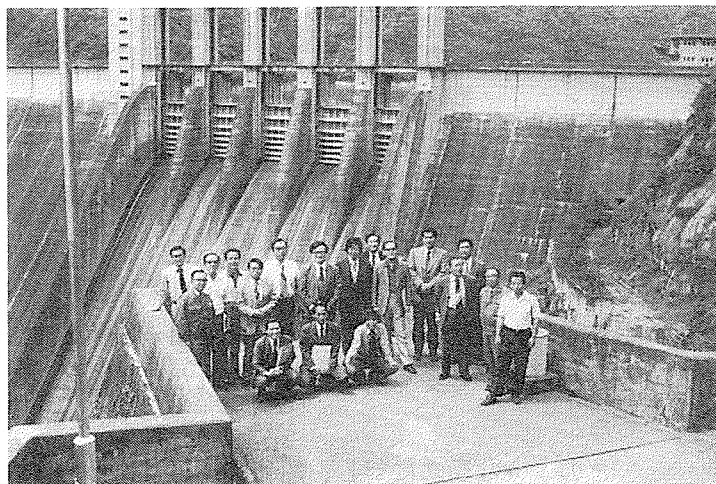
昭和61年 5月 土木学会昭和61年度
 功績賞受賞

(ハ) 電源開発(株)時代(昭和27年11月～昭和34年 3月)

昭和27年11月電源開発(株)創立時に初代総裁高崎達之助(関西出身)より永田年理事の希望によって、関西電力社長に、野瀬正儀を外向させる様要請があった。

第1号ダムとして佐久間ダム建設の為に、高崎総裁に同行して野瀬正儀設計課長が、アメリカのダム視察と重機械、プラント等購入の為に奔走した。

佐久間ダムは重機械の活用によって、3年間の短期間で、難工事を完成出来た。本店の指揮官は、野瀬正儀設計課長、現地の総指揮官は永



佐久間ダムにて



庄川増設工事

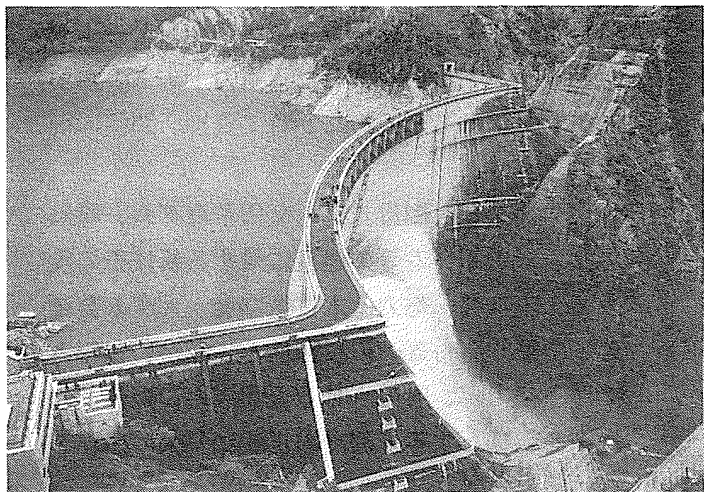


黒部ダムより立山を望む

田年理事、佐久間建設所長のラインで見事立派な成果をおさめた。

第2号ダムは御母衣ダムで河床60mの砂礫層につくるダムとして、ロックフィルダムを野瀬正儀土木部次長が提案し、(吉越、中山等の提案を諒承して) 齊藤三郎副総裁、永田年理事の諒解を得て着工にふみきった。(アメリカのロックフィルダムの経験者、リユーロ・クライメーション社と、アトキンソン・カンパニーの技術指導をうける条件で)

第3号ダム田子倉ダム、第4号ダム奥只見ダムと大ダムの建設着工につぎつぎと努力した。

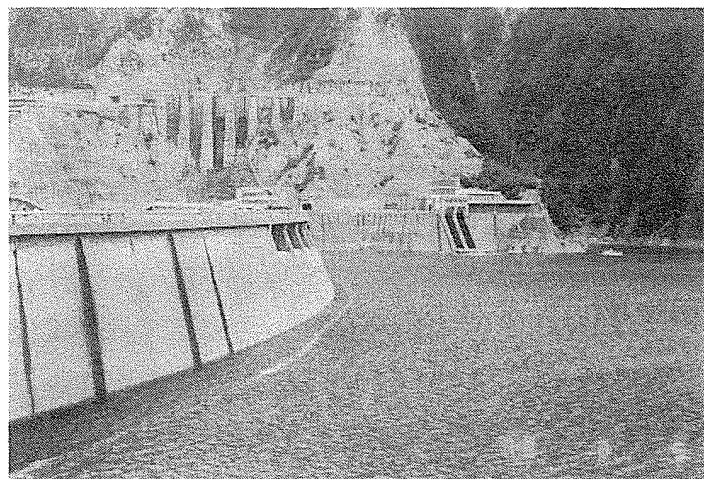


黒部ダム（下流）

(二) 関西電力時代（昭和34年3月～昭和50年6月）

黒部川第4水力発電所建設事務所長として昭和34年3月関西電力㈱に復帰し昭和38年11月まで所長として、世紀のアーチダム黒部ダム総指揮官として、見事完成させた努力は、野瀬正儀の新技术への積極的挑戦力と部下の包容力、渉外力の総合した人間性の賜物と思われる。

取締役、常務取締役、専務取締役として関西電力の技術陣の首脳陣として、水力、火力、原子力の土木建設業務を推進した功績は偉大なものがある。



黒部ダム（上流）

(木) 電源開発副総裁時代（50年6月～58年5月）

電源開発副総裁として、日本国内のみならず海外の電力開発に大いに力を発揮すると共に、後輩の指導育成に貢献した功績は多大である。

特に土木学会、電力土木技術協会、国際大ダム会議等への貢献は特筆に値する。

(ハ) 新日本技術コンサルタント会長時代以降

(昭和58年6月～平成8年)

新日本技術コンサルタントを国内及び海外の一流コンサルタントに育て上げた会長としての業績は勿論、後継者、後輩の指導育成に努力された姿には頭がさがる。

黒部川ダム竣工に際しての栄誉、藍綬褒章、勲二等瑞宝章の栄誉でむくわれた。電力土木に一生ささげた野瀬正儀の、静養されて一日も早く回復される事を祈る。



下小鳥ダム

(ト) 私の野瀬正儀観

日本発送電、関西電力、電源開発、新日本コンサルタントと長年にわたる電力土木への勤務の中で、筆者もその折にふれて直接、間接に御指導をうけた。

佐久間ダム、御母衣ダム、田子倉ダム、奥只見ダム、黒部ダム等の建設に対する新技術の投入、土木学会、電力土木技術協会、大ダム会議等、学際的協力等への積極性と、暖かい包容力で部下を指導、啓発させる人間性と、野球、水墨画を趣味とする人間野瀬正儀に多大の感銘をうける。

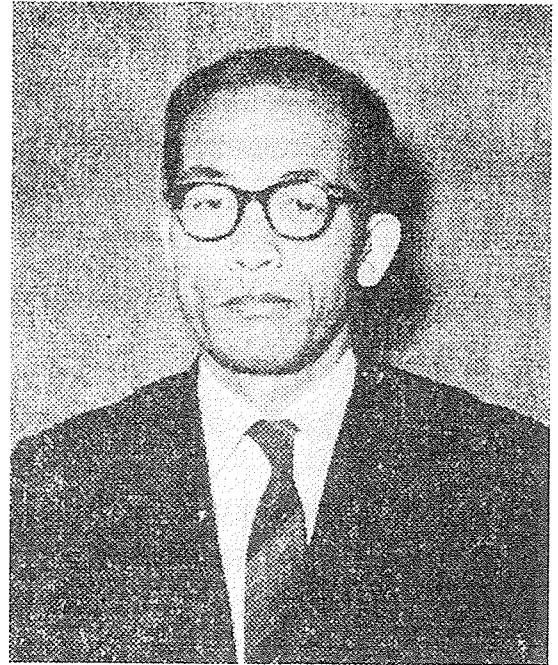


トルコ、ハツサンウールダム（昭和58年）



トルコ、ハツサン小学校にて（昭和58年）

(4) 畑野 正



(イ) はじめに

筆者が電力中央研究所に畑野正、高橋忠を尋ねダムの耐震関係について相談に行ったのは昭和26年10月であった。

当時、両氏は寒天模型による重力ダムの振動実験に取り組んでいた。

今回電力中央研究所所長江刺靖行氏に資料写真を送っていただき本稿をまとめ得た。江刺所長に心から感謝致します。

(ロ) 畑野正の年譜

大正2年11月 東京都目黒区に出生
昭和12年3月 東京帝国大学工学部土木工学科卒業
昭和12年7月 富士川電力(株)入社
昭和18年2月 日本発送電力(株)入社
昭和26年5月 東京電力(株)引継入社
昭和26年5月 工学博士
昭和26年12月 財団法人電力中央研究所へ出向
昭和33年7月 電力中央研究所第二部
当任研究担当

昭和34年 4月 電力中央研究所主任研究員
 昭和39年 4月 同所技術研究所長付
 畑野研究室勤務
 昭和40年11月 同所理事待遇
 昭和42年 4月 同所技術研究所副所長
 兼土木第二部畑野研究室長
 兼原子力発電技術研究室長
 昭和42年11月 同所理事就任
 昭和45年 4月 同所技術第一研究所長
 昭和48年 4月 技術第一研究所長
 昭和49年 4月 将来技術企画室長
 昭和50年11月 将来技術調査総括室長
 昭和52年 7月 将来技術調査総括室に関する
 業務
 昭和54年 4月 立地環境研究総合本部長及び将
 来研究総合調査室に関する業務
 昭和55年 6月 理事退任、特別顧問就任
 昭和58年 6月 特別顧問退任
 平成元年11月 死去 享年75才

(ハ) 主な研究論文

重力堰堤に作用する地震力の影響
 (昭和23年－昭和25年土木学会)
 寒天模型による重力ダムの振動実験
 (昭和26年土木学会)
 地震に対するアーチダムの安定性
 (昭和30年電研所報)
 衝撃引張荷重によるコンクリートの挙動
 (昭和36年土木学会)
 周期的圧縮荷重によるコンクリートの挙動

(ニ) 電力中央研究所時代

敗戦直後の困難と、未熟な計測技術の時代に、自ら数理的な議論を展開して、重力ダムの曲げ振動の厳密解を求め、さらに水の圧縮性を組み入れ、有名なWestergaardの動水圧理論の不備を正した。またコンクリートの動的特性を明らかにするなどダムの耐震設計の先駆者の一人。

後年、電気事業の将来を視野にいたした課題を探索するなど経営の重責を果たした。

(ホ) 私の畑野正観

筆者が電力中央研究所に畑野正、高橋忠を尋ねダムの耐震関係について相談に行ったのは、26年10月であった。当時両氏は寒天模型による重力ダムの振動実験に取り組んでいた。

爾後、時々電力中央研究所を尋ね畑野正の指導を受けた。今回江刺理事長より送っていただいた資料の中の畑野正の学位論文の自序を読んで、研究に対する厳しい考え方を述べているのに深い感銘を受けた。

「研究者の生活は厳しい。誰もやらない事を一日でも早く仕あげて発表するという激甚な競争裡にある。自分が計画している研究が既に誰かにやられてはいないかを知る為に文献を調べる。敗戦直後の困難と、未熟な計測技術の時代から、自ら数理的な議論のみに止り、重力ダムの振動などと言う大問題を即物的にこなすことは到底出来ない。表題に“重力ダムの振動に関する一寄与”としたのを現物ダムに直接触れ得なかった点を示す遠慮を表した積りであった。それでも当時としては土木学会論文集を貫うことが出来た。

研究者は常に激甚な競争裡にあるばかりでなく、自分自身に対して常にauthebenしなければならぬ。この意味で研究者がある研究をなし遂げると、その瞬間にこの研究はなくなってうのだ。研究者は従って、研究を遂行する過程に喜びを見出し、その成果は一般の評価や利用にゆだねるだけである」

以上の見解を見出し、畑野正の研究に対する真摯な態度に敬服する。

(5) 田中治雄



昭和34年11月 技術士合格（応用理学部門）
昭和35年4月 同所第二部当任研究担当
昭和40年11月 同所理事待遇
昭和42年4月 同行技術研究所副所長
兼地質部田中研究室長
昭和42年11月 同所理事就任
昭和44年11月 同所理事退任
昭和44年11月 同所顧問就任
昭和44年11月 新日本技術コンサルタント
事務取締役
平成8年1月 死去 享年84才

(イ) はじめに

著者が田中治雄と富山県神通川第二ダムの地質調査に現場へ同行したのは昭和24年10月で10日間猪谷旅館で同宿したのが初めてで、爾来、年に1回程現場の調査に同行して地質についての指導をうけた。

今回電力中央研究所の所長江刺靖行氏より資料、写真を送っていただき本稿をまとめ得た。

江刺所長に心から感謝致します。

(ロ) 田中治雄の年譜

大正元年12月 大阪市福島区に出生
昭和12年3月 東北帝国大学理学部地質学
古生物学科卒業
昭和12年4月 日本鑿泉探鉱(株)入社
昭和14年5月 日本発送電(株)入社
昭和24年3月 同社電力技術研究所土木科
地質研究室主任研究員
昭和26年5月 関西電力(株)引継入社
昭和26年5月 財団法人電力中央研究所へ出向
昭和32年4月 工学博士
昭和32年12月 同所技術研究所第二部
地質研究室研究担当
昭和34年4月 同所主任研究員

(ハ) 電力技術研究所時代など

ダムの地質のパイオニアで、当時は地質課長として席を温める暇もなく、全国の水力地点にその足跡を印し、高いダムの代表的なものとして知られる、上椎葉、殿山、黒四のアーチダムをはじめ、各地の水力地質調査に指導的役割を果たした。多くの現場経験から生まれた、いわゆる田中式の「ダム基礎岩盤分類」や貯水池堆砂量の推算法は、その汎用性の故に今でも広く用いられている。昭和44年に故郷大阪に戻り、新日本技術コンサルタント(株)専務として海外の調査活動に大きな足跡を残す一方、世界銀行技術顧問として、インドネシアの水力開発に盡力した。

(ニ) 私の田中治雄観

昭和24年10月神通川第二ダムの地質調査に同行して以来30年間程毎年一回ダム現場で指導をうけ、柔和な人当たりのよい、活快な話し振り
と地質踏査探究にかける情熱が、今も私の脳裡
に焼きついて懐かしさでいっぱいである。

(以上)